

## よみがえりの主との出会い

2009. 4. 14 (火)

ベック兄メッセージ (メモ)

### 引用聖句

ヨハネの福音書 20章1節

さて、週の初めの日に、マグダラのマリヤは、朝早くまだ暗いうちに墓に来た。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。

ヨハネの福音書 20章11節から18節

しかし、マリヤは外で墓のところにたたずんで泣いていた。そして、泣きながら、からだをかがめて墓の中をのぞき込んだ。すると、ふたりの御使いが、イエスのからだがかがれていた場所に、ひとは頭のところに、ひとは足のところに、白い衣をまわってすわっているのが見えた。彼らは彼女に言った。「なぜ泣いているのですか。」彼女は言った。「だれかが私の主を取って行きました。どこに置いたのか、私にはわからないのです。」彼女はこう言ってから、うしろを振り向いた。すると、イエスが立っておられるのを見た。しかし、彼女にはイエスであることがわからなかった。イエスは彼女に言われた。「なぜ泣いているのですか。だれを捜しているのですか。」彼女は、それを園の管理人だと思って言った。「あなたが、あの方を運んだのであれば、どこに置いたのか言ってください。そうすれば私が引き取ります。」イエスは彼女に言われた。「マリヤ。」彼女は振り向いて、ヘブル語で、「ラボニ (すなわち、先生)。」とイエスに言った。イエスは彼女に言われた。「わたしにすがりついてはいけません。わたしはまだ父のもとに上っていないからです。わたしの兄弟たちのところに行って、彼らに『わたしは、わたしの父またあなたがたの父、わたしの神またあなたがたの神のもとに上る。』と告げなさい。」マグダラのマリヤは、行って、「私は主にお目にかかりました。」と言い、また、主が彼女にこれらのことを話されたことを弟子たちに告げた。

ヨハネの福音書 20章24節から29節

十二弟子のひとりで、デドモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたときに、彼らといっしょにいなかった。それで、ほかの弟子たちが彼に「私たちは主を見た。」と言った。しかし、トマスは彼らに「私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところに差し入れ、また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません。」と言った。八日後に、弟子たちはまた室内におり、トマスも彼らといっしょにいた。戸が閉じられていたが、イエスが来て、彼らの中に立って「平安があなたがたにあるように。」と言われた。それからトマスに言われた。「あなたの指をここに付けて、

わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしのわきに差し入れなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい。」トマスは答えてイエスに言った。「私の主。私の神。」イエスは彼に言われた。「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ずに信じる者は幸いです。」

コリント人への手紙・第一 15章3節から8節

私があなたがたに最も大切なこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおり、私たちの罪のために死なれたこと、また、葬られたこと、また、聖書に従って三日目によみがえられたこと、また、ケパに現われ、それから十二弟子に現われたことです。その後、キリストは五百人以上の兄弟たちに同時に現われました。その中の大多数の者は今なお生き残っていますが、すでに眠った者もいくらかいます。その後、キリストはヤコブに現われ、それから使徒たち全部に現われました。そして、最後に、月足らずで生まれた者と同様な私にも、現われてくださいました。

今読まれた箇所を見ると、大切なことは、主は生きておられるということを考えることです。一番大切なのは、新しく復活なさったイエス様にまみえ、新たにされることなのではないでしょうか。本当に私たちは、喜びをもって、誇りをもって、「私たちの主は、生きておられる」と言うことができますから、最高に幸せなのではないでしょうか。

パウロは、「イエス様は、最後に私に現われてくださった」と言って、「よみがえりの書」を書いたのです。コリント第一の手紙は、本当に素晴らしい手紙です。一番知られているのは、愛の書、コリント第一の手紙13章ですが、同じように大切なのは、15章、よみがえりの書ではないかと思います。

パウロは、どうしてイエス様を知るようになったのでしょうか。理屈に迫られ、納得させられたので、イエス様を知るようになったのでしょうか。また、脅かされ、強制されたので、イエス様を信じるようになったのでしょうか。決してそうではありません。パウロは復活なさったイエス様との出会いによって、開かれた「心の眼」を持つようになったのです。パウロは、「私は監禁されてしまった。捕まえられてしまった」と、喜んで言うようになれたのです。

パウロは、どうしてイエス様を紹介する者となり、イエス様の証し人となったのでしょうか。それは、よく聖書を勉強したからでしょうか。決してそうではありません。復活なさったイエス様にお会いしたので、イエス様を紹介せざるを得なくなったのです。

それでパウロは、このよみがえりの書をコリントにいる兄弟姉妹に書き送ったのです。どうしてかと言いますと、「必要」だったからです。しかし、コリントの兄弟姉妹だけでな

く、私たちにもこの書が本当に必要なのではないかと思います。

コリントの信者は、もちろんイエス様の復活を疑いませんでした。心から信じました。けれど手紙を読むと分かりますが、彼らは実際生活においてよみがえりの主の力を持っていなかったのです。自分の知恵に頼って、自分の力に頼って動いた人々でした。コリントの信者は、それぞれイエス様に仕え、イエス様のために奉仕しようと思ったのです。努力してみましたが、全部失敗に終わってしまったのです。思い通りにいかなかったのです。

パウロは、このコリントの兄弟姉妹の失敗の原因についてはっきり言ったのです。即ち、「あなたがたは、よみがえりを体験する「前」の状態です。よみがえりの土台の上に生活していません」と指摘しています。もし、私たちが、生まれながらの性質から解放され、イエス様のよみがえりの力に合わせられないなら、私たちの信仰生活は、確かに上がり下がり下がったりするでしょう。

ペテロ、ヤコブ、パウロも、その他多くの「よみがえりの主イエス様」に出会った人々は、自分の肉の力から解放され、御霊に動かされた生活へと引き入れられました。即ち、自分で考えるよりもまず、「主よ。どうしたらいいのですか。教えてください」と祈るようになったのです。

パウロは、コリントの兄弟姉妹にも、よみがえりの体験に入ることを願ったので、この書を書いたのです。私たちも様々な苦しみを通して、この主の驚くべきよみがえりの力を体験的に自分のものとする必要があるのではないのでしょうか。

聖書の中から、この復活の主に出会った人々について考えたいと思います。復活なされたイエス様との出会いによって、彼らは根本的に変えられました。

\* 最初にイエス様に出会ったのは、弟子たちではなかったのです。男ではなく、一人の女性でした。「マグダラのマリヤ」という女性でした。

彼女は、「復活なされたイエス様」との出会いによって何を得たかと言いますと、「全く新しい愛」です。彼女は、墓から復活されたイエス様に最初にお目にかかった者です。どうして、彼女はこの素晴らしい特権にあずかったのでしょうか。イエス様を最も愛したからではないのでしょうか。イエス様にすべてをささげ尽くしていたのではないかと考えられます。

けれど、なぜ最初にイエス様は、マリヤにご自身を現わされたのかと言いますと、もう一つのことを考えられます。それは、彼女には一刻も早くよみがえりの主を見る必要があったからです。彼女は、イエス様が死なれた時、本当にがっかりし、絶望し、沈んでしまったからです。きっと何も食べられなかったでしょう。眠れなかったに違いありません。もうおしまい。

マルコ伝 16章9節を読むと、次のように書かれています。

マルコの福音書 16章9節

さて、週の初めの日の朝早くによみがえったイエスは、まずマグダラのマリヤにご自分を現わされた。イエスは、以前に、この女から七つの悪霊を追い出されたのであった。

彼女がどうして悪霊にとり憑かれるようになったのか分かりません。けれどこの節を見ると、彼女は確かに、かつてイエス様に七つの悪霊を追い出していただいたことが書かれています。彼女は、悪霊に憑かれて、恐ろしい生活をしていたに違いありません。それは喜びもなく、平安もなく、自由もない、希望もない生活だったでしょう。ですから、イエス様に悪霊を追い出していただいた時に彼女が体験した解放は、考えられないほど素晴らしいものだったに違いありません。このイエス様に、マリヤが持てる愛をすべてささげ尽くしたのは無理もありません。イエス様はマリヤのすべてだったのです。

イエス様が十字架で死なれた時の彼女の悲しみは、どんなだったでしょう。もしイエス様がよみがえられなかったら、マリヤのイエス様に対する愛は、なおさら彼女を絶望に追いやり、悲しみに落とし込んだに違いありません。言うまでもなく、マリヤの愛の対象は、決して間違っていないでした。神の御子イエス様を、心から愛し抜いていたからです。けれどその愛が、「よみがえりの力」に基づかず、人間的な愛なら、絶望に終わってしまいます。

現われなされたイエス様を見た時、マリヤは喜びのあまりイエス様に抱きつこうとしました。聖書を読むと、その時イエス様はマリヤに「わたしにすがってはいけない」と御声をかけられたことが書かれています。イエス様は、なぜそのような言われたのでしょうか。マリヤのご自分に対する清くはあるが「肉による愛」を、「霊による愛」に変えなければならぬことをお教えになりたかったのですが、その意味はもちろんすぐに分らなかつたでしょう。イエス様が昇天された後に、マリヤが霊によってイエス様を愛するようになる備えをなさったのです。

もし、私たちの献身や愛が、「よみがえりの土台」の上に立っていないなら、やがてそれらは崩れて、絶望に終わるでしょう。「よみがえり」は、イエス様に対する「新しい愛」を与えてくださいます。「よみがえりの前」の土台に立っている者は、「イエス様とともに十字架につけられ」、「主とともに葬られていない人」です。マリヤがそうでした。彼女の愛は、本当にきれいな清い愛でしたが、人間の愛でした。

では、マリヤのこの愛を少し考えてみましょう。マリヤの愛は、

- ・まず、イエス様が自分になしてくださった恵みの御業に答える愛でした。癒された、解放されたので愛さないではいけないという、感謝の気持ちでいっぱいでした。彼女は七つの悪霊を追い出していただいたので、本当に感謝の思いでイエス様を愛したに違いありません。
- ・二番目、彼女が愛したイエス様は肉体をとっておられたので、目に見えるお方としての

イエス様を愛していたわけです。マリヤは、目に見えるイエス様を愛しました。

- ・三番目、このマリヤの愛は、人間的なものであったため、絶望に終わってしまいました。

これに対して、「よみがえりの主」にあずかり、「よみがえりの土台」として、その上に立っている人は、苦しみを通し、悩みを通し、主とともに十字架につけられて死に、ともによみがえらされ、天上の座に着かせていただいた人であり、まことの主の愛をいただいた人です。

「よみがえりのイエス様」にあずかり、主の愛を持つ者は、

- ・まず、イエス様がなしてくださった御業のために主を愛するのではなく、イエス様ご自身を愛します。それらの人々は、イエス様を知っています。イエス様との親しい交わりを持っています。イエス様の御旨を知って、主だけを喜びとしています。

- ・二番目に、よみがえりに基づいた人々は、「目に見えないイエス様」を愛しています。即ち、聖書は「信仰によって歩んでいます」と。初代教会の人々は、どうしてそれほどに魅力的であったか、また用いられたかと言いますと、「信仰によって歩んだ」人々だったからです。コリント第二の手紙4章を読むと、次のように書かれています。勝利の生活の秘訣についての箇所です。

コリント人への手紙・第二 4章16節から18節

ですから、私たちは勇気を失いません。たとえ私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。

イエス様は、言われました。「わたしは死にましたが、見よ。いつまでも生きている」と。

- ・最後に、このイエス様の愛は、たとえ、その理由がどのようなことであっても、理解に苦しむようなところに置かれたとしても、愛し、愛し抜く愛です。

これらの人々は、パウロのように次のように言うことができるでしょう。ローマ人への手紙の8章、聖書の中で最も素晴らしい箇所の一つではないかと思います。

ローマ人への手紙 8章35節から39節

私たちがキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。「あなたのために、私たちは一日中、死に定められている。私たちは、ほふられる羊とみなされた。」と書いてあるとおりです。しかし、私たちは、私たちが愛してくださった方によって、こ

れらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。

「私はこう確信しています」。望んでいます、だけではないのです。期待しています、でなく、「確信する」です。

「主の愛」は、すべてのものに勝ち得て余りある愛です。この「主の愛」とは、パウロが以前に話したコリント第一の手紙13章の愛です。二、三節読みましょう。この中には、何度も何度も「愛」という言葉が出てきます。「愛」の代わりに自分の名前を入れると笑い話になりますが、「愛」の代わりに、「イエス様」と入れたら、明らかです。

コリント人への手紙・第一 13章4節から7節

**愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、不正を喜ばずに真理を喜びます。すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます。**

私たちの場合はどうでしょうか。私たちは、主のためにあれをやり、これをやり、奉仕しますが、イエス様との親しい交わりを持っている兄弟姉妹はどれだけいるのでしょうか。祈りはそのまま主との交わりであるということにはなりません。イエス様も私たちに語りかけることができなければ、交わりになりません。一方通行ではないからです。

聖書は、勉強するために与えられているというよりも、祈りの材料として与えられています。ですから、みことばを読んで祈るようになれば、或いは、祈りながらみことばを読むと、道が開かれます。元気になります。

私たちも、マリヤと同じように、「よみがえりの前」の土台に立っているのではないのでしょうか。マリヤは、イエス様を神の御子と信じ、しかも自分を悪の霊から解き放ってくださったお方として経験し、心から愛しました。けれど、マリヤは絶望に陥ったのです。

多くの救われた兄弟姉妹は、罪の赦しを確信し、主との平和をいただいています。そして、人間的な愛でイエス様を愛しています。生まれながらの賜物、自分の力をもってイエス様に仕えようとしています。ですから、信仰生活はとめどもなく、上がったたり下がったりします。本物の主との交わりがないからです。

イエス様と一つになることができないということは、よみがえりの「前」の土台に立っているからです。よみがえりの土台に立つ者は自らの力で主に仕えようとしません。自分の力に頼ることをやめ、人間の誉れを望まず、よみがえりの主におまかせし、おゆだねす

ることは、何という自由でありましょうか。

自分を愛する愛は、憐れっぽい愛です。自分を愛する愛は傷つきやすいものです。これに対して主の愛は、傷つきにくいものです。「主の愛」は、しるしを求めません。「主の愛」は、信仰によって、目に見えないものを望み見て歩みます。私たちが差し迫って必要としている愛は、主に対する「新しい愛」なのではないでしょうか。

もし、イエス様がよみがえられなかったら、はたしてマリヤは七つの悪霊に立ち向かうことができたのでしょうか。「よみがえりの土台」に立っていないコリントの兄弟姉妹は、どうだったでしょう。憎しみとねたみと傲慢と汚れの霊に打ち負かされ、全く証しがたっていないませんでした。私たちの集会はどうでしょうか。

イエス様が私たちに、マグダラのマリヤのように「新しい愛」を授けられ、私たちが真心からパウロのように、「よみがえりの主は、最後にこの私に現われてくださった」と喜ぶことができたなら、本当に幸いと思います。

\* このイエス様の「よみがえり」の姿を拝し、新しくされた一人の弟子である「ペテロ」についても、ちょっと考えたいと思います。

ペテロは、復活なさったイエス様にお会いして何をいただいたのかと言いますと、「新しい信頼」です。イエス様のよみがえりは、ペテロにとってすべてとなったのです。もし、イエス様がよみがえられなかったら、ペテロはどうなっていたか分かりません。ペテロはイエス様を公然と否認しましたし、「私はイエス様を知らない。何のことか分からない」と、愛するイエス様を三度も裏切ってしまったのです。

彼は、特にイエス様のみそば近く歩み、三年半イエス様に愛されるという特権にあずかり、いろいろな忠告をイエス様の口から聞くことができたにもかかわらず、しかも、「私は決してイエス様を捨てない」と誓ったにもかかわらず、ペテロはイエス様を否んでしまいました。否んだイエス様は十字架で死なれました。地上でペテロを助けられる者はひとりもいませんでした。よみがえりのイエス様だけが、ペテロを助けることがおできになったのです。

マルコの福音書 16章6節、7節

青年は言った。「驚いてはいけません。あなたがたは、十字架につけられたナザレ人イエスを捜しているのでしょう。あの方はよみがえられました。ここにはおられません。ご覧なさい。ここがあの方の納められた所です。ですから行って、お弟子たちとペテロに、『イエスは、あなたがたより先にガリラヤへ行かれます。前に言われたとおり、そこでお会いできます。』とそう言いなさい。」

よみがえられたイエス様は、使いを送り、ご自分のよみがえりを弟子たちに告げられましたが、特にペテロの名前を挙げて、「イエス様はよみがえられました。今から弟子たちとペ

テロ…」と。もちろんペテロも弟子たちの一人でしょう。弟子の代表的な者でした。けれどここで、「弟子たち」だけではなく、「弟子たちとペテロ」のところに行って、こう伝えなさい、とあります。

ペテロは、イエス様を否んでしまったままでイエス様が死なれたので、全く打ちのめされていました。もし、「弟子たちとペテロ」と、ペテロの名前を特別につけて名指しで呼ばれなければ、ペテロは立ち上がれなかったでしょう。ほかの弟子たちは、たぶん「ペテロは主を裏切ったから、もう私たちの群れには縁の無い者だ」と、ペテロを軽蔑していたかもしれません。または、ペテロがイエス様を否んだので、ほかの弟子たちはペテロを指導者として仰ぐことをやめていたかもしれません。ペテロは信頼を失ったに違いありません。このペテロに対する疑いを解くために、「弟子たちとペテロ」と、イエス様はペテロの名前を特につけ加えられたに違いありません。

私たちも、ペテロと同じではないでしょうか。ペテロは、私たちの間でも例外ではなく、当たり前のことになってはいないでしょうか。もし、私たちが「よみがえりの前」の土台に立っているなら、何か大きな試みがやってくると、必ず簡単にイエス様を否んでしまうことになるでしょう。私たちは、偽りやすい自らを信頼することは絶対にできません。たとえ前に決心し誓っても、自分の決心はいつしか崩れ、「裏切る」といった結果になってしまいます。

もちろんペテロは、指導者となるべく、イエス様から召しを受けました。けれどこの時は、イエス様を否み、イエス様の弟子であるかどうかさえ仲間たちに疑われています。イエス様のよみがえりは、ペテロをどん底から救い出しました。ペテロは、もとのペテロに回復されました。ほかの仲間の目にも、ペテロは見事な立ち直りを見せました。

ペテロは、「主を否む」という悲しむべき出来事を通して、自らの真相を知ることができました。主を否んでから、イエス様がよみがえられるまでの三日間は、何という暗い日々だったでしょう。ペテロにとっては、この三日間は本当に闇でした。けれど、この真っ暗な夜を通される必要があったのです。もし、ペテロによみがえりの主が現われてくださらなかったなら、ペテロは絶望のため立ち上がることができなかつたでしょう。

私たちも、イエス様に用いていただくためには、ペテロと同じ体験をしなければなりません。私たちは自我に満ちた生活をやめ、主のうちに生きる「よみがえりの土台」に立たされなければなりません。

「よみがえりの主」は、ペテロに現われなさって、二人で何かお話し合ったはずですが、その時イエス様はペテロに何をお語りになったか、聖書に記されていませんので分かりません。しかしルカ伝 24章34節には一文章だけなのですが、次のように書かれています。

ルカの福音書 24章34節

「ほんとうに主はよみがえって、シモンにお姿を現わされた。」と言っていた。

とあります。この箇所からイエス様はシモン・ペテロと親しくお話しになったことだけはよく分かります。イエス様がペテロと何を話されたか知る必要はありませんし、知る由もありませんが、私たちはペテロと同じように主に対して不真実であり、不信頼に満ちた心の持ち主であることを教えていただかなければなりません。それを教えられて初めて、後に見事に立ち直ったペテロと同じようになることができるのです。

ペテロは火を通された後、ゆるがないその名前のように、「岩」のようなキリスト者になりました。ペテロは、多くの人々の信頼を受けるに足る信者になりました。よみがえりの主は、ペテロを新しくし、ペテロはイエス様に対する新しい信頼を持ち、また多くの人々に信頼される人と造り変えられたのです。

今、私たちが差し迫って必要としているものの一つは、その主に対する新しい「投げ頼み」ではないでしょうか。

\* よみがえりの主にお会いして著しく変えられた「トマス」について、ちょっと考えていと思います。

前に読みました箇所を見ても分かります。トマスは新しい信仰を与えられました。彼は、もともと疑問に満ちた疑い深い性質の持ち主だったのです。もう一度読んでみましょう。

ヨハネの福音書 20章24節、25節

十二弟子のひとりで、デドモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたときに、彼らといっしょにいなかった。それで、ほかの弟子たちが彼に「私たちは主を見た。」と言った。しかし、トマスは彼らに「私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところに差し入れ、また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません。」と言った。

ほかの弟子たちは、主のよみがえりを知って喜び、これを仲間のトマスに知らせましたが、彼は頑として信じようとしなかったのです。個人的な疑いは、イエス様に親しくお目にかかるまで解けません。聖書を読んでいきますと、「よみがえりの主」は、疑い深いトマスのためにわざわざもう一度現われてくださったことが分かります。何という恵み深い主でありましょう。

自分のこの指をイエス様の手と足と脇腹の傷に差し入れてみないうちは、イエス様のよみがえりを信じることができないと言っていたトマスが、目の前に現われ給うたイエス様の御姿を拝した時、指を傷に当てるところか、ただその場にひれ伏してイエスを拝した、礼拝した、とあります。疑い深いトマスがこんなに変えられたのは驚くべきことです。

彼は、信じるようになっただけではなくて、「まことの礼拝者」になりました。トマスは疑い深い者でしたが、新しい「光」が与えられたらこの疑惑が解けるのだがと、絶えず

「光」を求めていました。

しかし、イエス様はなぜもっと早くトマスに現われてくださらなかったのでしょうか。悪かったのはトマスなのです。ほかの兄弟、弟子たちと一緒にいなかったからです。もし、トマスが兄弟のところに帰って来ないで、そのまま自分の道を歩んだなら、イエス様にお会いすることができなかつたばかりか、悲しい結果に終わったかもしれません。イエス様は、救われた者の一人一人のかしらであられるばかりでなく、信じる者の群れ、即ちご自分のからだなる教会のかしらです。ですから、主は、兄弟姉妹がともに集まり御名を賛美しているところに、ご自分をお現わしになることが多いのです。

「疑い」は、それほどひどく悪いことではないと思います。トマスは、正直な男でした。彼は、イエス様のよみがえりを信じるができなかつたので、自分を偽らずにはっきり、「自分は信じられない」と言ったのです。隠そうとしなかつたのです。多くの人々は、信じられないのに、あたかも信じたかのように自分を偽って歩みます。トマスは、これらの人々よりよほどまじだと思えます。

私たちは、それぞれ問題を持っています。またこれからもちろん持つようになります。その中には、「よみがえりの主」が現われてくださらなければ、どうしても解決できない問題にぶつかることが必ずあります。そのような時は、トマスのように心から「新しい光」を求めましょう。そうすると必ず「よみがえりの主」が問題に解決を与えてくださいます。

トマスは「新しい光」を求めて、それを受け入れる備えをしていました。彼は主を信じる仲間に入って一緒に前進することを拒みませんでした。彼は疑いながらも交わりに加わっていました。そして、イエス様がトマスに現われなされた時、トマスは主イエスの御前にひざまずきました。

私たちの過去を振り返ってみると、本当に主に対して「不信仰者」であり、イエス様を悲しませた者であることが分かります。私たちが今日、今一番必要としているものの一つは、「よみがえりの主」に新しくお会いし、「新しい信仰」をいただくことではないでしょうか。

\* もう一人は、「ヤコブ」です。

彼は、よみがえりの主との出会いによって何をいただいたかと言いますと、「新しい義」です。前に読みましたコリント第一の手紙15章7節に、  
コリント人への手紙・第一 15章7節前半

その後、キリストはヤコブに現われ、

と書いてあります。このヤコブは、肉の上ではイエス様の弟だったのです。後にこのヤコブは、「義人ヤコブ」と言われるようになり、エルサレムのからだなる教会の監督になった人でした。そして、彼の書いた手紙ヤコブ書を読むと、ヤコブは「正しさ」、「義」を強く主張したのです。

このヤコブが長年心に持っていた悩みは、「本当の義」を自分は持っていないで、「自分の持っている義」は「おきての義」、「自分の義」だけだということでした。彼は、生まれ落ちるなり神の御子であるイエス様を兄として一緒に暮らしていながら、イエス様を批判し、最後にはイエス様を拒みました。たぶん彼は、イエス様が罪人たちと一緒に食事をなさり、「おきて」を守らず、「安息日」を守らないでおられたことから、当時の聖書学者たちと同じようにイエス様を拒んだに違いありません。

ヨハネの福音書 7章5節

**兄弟たちもイエスを信じていなかったのものである。**

とあります。イエス様にとって悩みの種だったに違いありません。ヤコブは、イエス様の生きておいでになる間、イエス様を信じませんでした。このイエス様を受け入れなかったヤコブが、ついにイエス様を受け入れるときがやってきました。イエス様は、今十字架の上で苦しんでおいでになります。苦しみの中からイエス様は、弟子ヨハネに向かって、「ヨハネよ。見よ。これはあなたの母です」とおっしゃって、ご自分の肉の母マリヤを弟子のヨハネに託されました。続いて、母のマリヤに向かい、「女よ。これは汝の子です」とおっしゃって、ヨハネに生涯の面倒をみてもらうように話されました。

イエス様は、なぜご自分の母を実の弟であるヤコブに託さず、ヨハネに託されたのでしょうか。たぶんヤコブは、最初からイエス様を信じていた母のマリヤと仲が合わず、離れていたからでしょう。自分を生んでくれた自分の母を自分にまかせられず、他人にゆだねなければならないとは、何と悲しい現実でしょう。これは、「己を正しい」とする罪の結果です。「自分を義」とする結果は、いつも悲劇そのものです。この世の人でさえ信仰のゆえに自分の母を見捨てるなどということはしないでしょ。しかし、「自分を義」としたヤコブは母を見捨てました。ヤコブは、このように「己を正しいとする人間」でした。

パウロは、コリント第一の手紙15章に、よみがえりの主が誰と誰に現われ給うたのか、順序を追って書いていますが、ヤコブの名前は後のほうに書かれています。イエス様は、「己を正しいとするヤコブ」より先に、罪人や取税人に現われなされたのです。けれど、ヤコブの身に、ついに奇跡が起こりました。彼は、「自分を正しい」とすることは何の役にも立たず、むしろ妨げになることを悟り、イエス様の前に砕かれ、「新しい義」をいただいたのです。

多くの人は、「己を義」とし、盲目になり、かつてのヤコブのように悲惨な状態に陥っています。「よみがえりの主」だけが、「自分を義」とすることから「ヤコブを解放」するこ

とができたのです。私たちもよみがえりの主に「新しくお会いする」ことができることによつてのみ、ヤコブと同じように「新しい義」を自分のものにすることができます。

\*コリント第一の手紙15章8節、「パウロ」は自分のことについて書いたのです。パウロは、イエス様が自分に現われてくださったことを書いたのです。

コリント人への手紙・第一 15章8節

**最後に、月足らずで生まれた者と同様な私にも、現われてくださいました。**

パウロは、「よみがえりの主イエス様」にお会いして、「新しい愛」、「新しい信頼」、「新しい信仰」、「新しい義」を受けたのです。私たちもパウロのように、「そして最後によみがえりの主は、私に現われてくださいました」と喜びをもって言えるようになれば、本当に幸いです。「よみがえりの主イエス様」にお会いしたら、私たちの生活は根底から変えられるようになるに違いありません。

イエス様は、私たちに「よみがえりのいのち」、また「よみがえりの力」を与えるために、死から復活なさいました。イエス様が与えてくださる「よみがえりの力」を受ける時に、そこから「新しい、愛・信頼・信仰・義」が湧き出てくるのです。私たちは、コリントの兄弟姉妹がそうであったように、理論ではなく、実際にイエス様の御前にひざまずき、砕かれ、イエス様の備えられるよみがえりの力を受け取りたいものです。

イエス様がもし実際によみがえられたのなら、イエス様の「よみがえりのいのち」、またイエス様の「よみがえりの力」は、私たちのために備えられて隠されています。この「よみがえりのいのち」は、私たちの生まれながらのいのちと全く性質を異にするものです。

このいのちは、マリヤのうちに、また、ペテロ、トマス、ヤコブ、パウロのうちに宿りたいのちであるばかりでなく、私たちのうちにも宿っておられる「キリストのよみがえりのいのち」です。

イエス様が私たちに、マリヤのように「新しい愛」、ペテロのように「新しい信頼」、トマスのように「新しい信仰」、ヤコブのように「新しい義」を授けられ、私たちが心からパウロのように、「よみがえりの主は、最後にこの私に現われ給うた」と喜ぶことができたなら、本当に幸いだと思います。

了